
存在理由

ユズポン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

存在理由

【Nコード】

N1261J

【作者名】

ユズポン

【あらすじ】

イナイレ第2段。グランが酷い事に！！なっています。それでもいい方は、どうぞ????

「戦いは終わった。平和がおとずれた俺達の前に、あの3人が現れて???!?!」

1 俺の存在意義は????

(な、なんと!! ついに雷門イレブンがエイリア学園最強チーム、ジエネシスを倒しましたー!!)

「よっしやあー!!!!!!」

皆が歓声をあげる中、ジエネシスは暗い空気に包まれていた。

「勝ちたかった??? お父様の??? お父様の為に???!!」
すると、吉良星次郎がいつのまにか降りてきていた。

「瞳子??? 私は、エイリア石にとりつかれていたのかもしれない。それを、瞳子や雷門イレブンの子達に気付かされました。そう??? ジエネシス計画そのものが間違っていたのかもしれない」

「!!!!??? ふざけるな!!」

「!?!」

するとウルビダは懐からサバイバルナイフを取り出した。

「な、なんであんな物を???」

「ジエネシスの皆は護身用に、1人ずつサバイバルナイフを持っているんだ??? やめるんだウルビダ!!」

グランが叫ぶが、ウルビダは止まらない。

「??? これほど愛し、尽くしてきた私達の存在を??? よりにもよってあなたが否定するなあっ!!!!!!!!!!」

そしてウルビダは走り出した。

「ああっ!?!」

そのスピードは尋常ではなく、リミッター解除のためか、ウルビダは風に見えた。

「っ!!」

そして皆が覚悟を決めた時???

グサッ

「っ???」

星次郎は恐る恐る目を開ける。しかし痛みは感じない。

「ゲ、グラン!?!」

いつのまにか、目の前にはグランが立っていた。サバイバルナイフは彼の体を貫通し、血がまんべんなく付着していた。

「う?????!」

ドサツ

グランが倒れた。一瞬のうちに血溜まりができた。

「っ!!!ヒロト!!!」

円堂が走りだす。

「おいっ、ヒロト!!!ヒロト!!!」

「????え????んどう????君????」

グランにはまだ辛うじて息があった。しかしそれも、長くは持たない。

「何故だ!!!何故かばった!?!そいつは尽くしてきた私達の存在を否定したんだぞ!!!答えるグラン!!!」

ウルビダが叫ぶ。

「????た?????しかに????父????さんは????否定したさ????でも????それ????でも????父さんは????俺????の大
事な????????父さんだ!?!????う!!!」

一気に喋った為、グランの口から血が出た。

「ヒロト!!!」

「????俺?????知ってた????この????ヒロトって????
????名前が????父さん????の死んだ????本当の息子の
????名前????だって????事?????」

「え?」

「だ?????から????俺は?????なりたかった??
????父さんの?????本当の????息子????にさ????」

そしてグランは気を失った。

「ヒロトオ!!!!!!」

「大丈夫よ!!!まだ弱いけど息があるわ????!!!」

瞳子が言う。彼女は冷静になるうとしてしているのか、その声は震えて

1 俺の存在意義は??? (後書き)

何か色々すみません???

2 昨日の敵は今日の友

病院・・・

「どうなんですか？ヒロトは?????!?!」

手術が終わり、グランが病室へと運ばれる所で、瞳子は担当医に聞いた。円堂は、グラン、いやヒロトの顔色が幾分良くなっていて、安堵の息を漏らした。

「命に別状はありませんね。あとは意識が戻るのを待つだけです。」

「良かった?????!?!」

皆には帰ってもらい、今は豪炎寺と鬼道と瞳子と円堂しかいなかった。

「とりあえずは、ひと安心ね????」

「それで、ウルビダはどうなるんですか？現に、人を刺してしまっただけですし????」

鬼道が言い、瞳子が答える。

「少年院に、送られるか、警察に捕まるか、どちらかでしょうね。」

そう言えば、ジェミニストームとイプシロンの子供達を警察が保護したそうよ

「円堂!!!」

「お、お前はつ!!!」

「よう、世宇子スタジアム以来だな」

「ガゼル!?バーン!?!」

「おっと、俺達にも本名ってモンがあるんだぜ？俺は南雲晴矢!!ガゼルは????」

「私は鈴野風介だ。よろしくな」

「あ、ああ????」

「それより、ヒロトの野郎が刺されたって本当なのか!?!」

「今病室に運ばれてったる?」

豪炎寺が病室の方向を指差す。

「つてか、何だかんだ言ってお前らもヒロトの事が心配なんだな？」
「／＼／＼い、いやっ」

「ト、トップ3が1人でも欠けたら不満だろ??」

「まったく否定になってねーぞ??」

「じ、じゃあ私達は病室に行くっ!!」

「お、おいっ!」

「はあ???あいつらなんだったんだよ?」

(あはははははははは)

嘘みたいだ???昨日まで敵だったあいつらの事を笑って話せるようになった???

心なしか円堂はそうおもっていた。

病室・・・

「ん????」

ヒロトが目を開けると、すぐに視界に入ってきたのはバーンとガゼル、円堂やその仲間達の顔。

「円堂君????みんな????」

「ヒロト!!どうだ?体は痛くないか?なんか飲み物いらさないか?それとも食べ物か?うん?」

「えつと????」

「おい円堂、そんな一気に言ったら混乱するだろっ?」

「そ、そうか??」

「おいヒロト、お前何が何でも無茶すぎだ!!」

「いくら幼なじみとはいえ、これは見逃せないな??」

「お、幼なじみ!?!?!?」

大声で叫んだ瞳子以外の3人に、トップ3は首を傾げていた。

「ん???どうした?そんなに可笑しいか?」

「い、いや、だってお前ら、幼なじみどうしてジェネシス争いしてたのか??」

「?別に普通だろ?」

「あ、そうか、円堂君達は幼なじみのイメージがけんかしない仲良し組だと思ってるんだね？」

「あー、俺らは違うね。ぶつかり合っこそ幼なじみってモンなんだ俺達は！！」

「はあ???」

楽しい団欒と共に、病室に笑い声が響いた。

3 また会える日まで??? (前書き)

短い????

3 また会える日まで????

「ヒロト〜来たぞ〜」

無防備な円堂の声が、病室に響き渡る。

「おはよう、円堂君」

「で、話って何なんだ？」

そう。今日はヒロトに話があると言われて見舞いついでに来たのだ。

「????俺、来月に留学する事にしたんだ」

「????へ？」

「父さんの息子が見た世界を俺も見てみたいんだ！バーンやガゼル????じゃなかった、晴矢と風介も一緒に行くって言ってくれたし、もつとサッカーを学んで、いつか円堂君達とプレイしたいから!!」

「そんなの????」

今でも出来るじゃないか、そう言おうとして、円堂は口を閉じた。ヒロトのキラキラ輝く瞳、エイリア学園に居た時は見た事もなかったヒロトの笑顔を見て、もう留学の決意は揺るがないんだと、せめてこつちも笑顔で見送ってやろうと決めたからである。

「そうか????じゃあ次に会う時には俺ももつと強くなつとかなきゃな!」

笑顔で、返した。

「ところでさ、お前髪下ろさないの?グランの時のままだろ？」

「ああ????この方が自分を忘れずに済むからいいんだ。落ち着くし」

1ヶ月後、飛行場にて...

「ヒロト、元気だな????!」

円堂はヒロトと握手を交わし、それからヒロト達3人は機上の人となった。

「また、サッカーやろうなー!!」

4 キックオフと共に「サッカー最高！」（前書き）

ヒロトが出ない話はたぶんありません！！

4 キックオフと共に「サッカー最高！」

あの日、ヒロトは旅立った。俺達もヒロトに負けないうようにと必死に練習を続けて、強くなったんだ！そして月日がたち、俺たちは中3になったんだ???

「えー、今日は転校生がいます。」

朝のホームルームで、担任がそう言った。

「入ってきなさい」

入って来たのは、見慣れた赤い髪???

「ヒ、ヒロト!?!?!?」

「やあ、円堂君。久しぶり」

「知り合いか?じゃあ円堂、仲良くしてあげるよ。彼の名前は???

本来はグランと言うべきなんだろう、なぜなら、髪を上げているからだ。

「基山ヒロトです。よろしく」

「ヒロト!?どうしたんだ!?!」

「どうしたって???留学が終わったから帰って来ただけだよ」

「じ、じゃあヒロト、晴矢と風介は?」

「隣のクラスで喧嘩してると思うけど???」

「な、なあヒロト」

「何?」

「放課後、サッカーしないか?」

「もちろん!!」

ヒロトは変わっていなかった???それが円堂には嬉しい事なのだ。

放課後 . . .

4 キックオフと共に「サッカー最高！」（後書き）

ヒロト（グラン）オンリーなユズポンです!!

「キャプテン!!!!!!!!!!」

遠くから、吹雪の声がした吹雪はダークエンペラーズとの決戦後、皆の承諾を得て、地元の北海道を離れ、東京に来たのだ。

「吹雪!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

「試合のゲスト、全員OKだつて。明々後日来てくれるように、言つといたから。」

「サンキュー!!!!」

「明々後日が楽しみだなあ。」

「さて、俺らも準備するか!!!!明日から休日だし、急ごうぜ!!!!」

「秋!!!!!!!!!!!!看板出来たか!!!!」

「あ、うん。今丁度出来た所なんだ。ほら見て!!!!」

それは、見事なまでの看板だった。

「おお!!!!明々後日が楽しみだな!!!!」

明々後日.....

「いよいよだね????」

「そうだな」

「3-Cの特別ゲストは、この方達です!」

ざわざわ?????

ゲストが現れ、皆が動揺する。

「イ、イプシロン!?!?」

その後、皆で全力で試合しましたとき。

ちゃんちゃん

5 中途半端な学園祭（後書き）

何かネタがなかったなので、ここで終わらせて頂きます。次は何と、ヒロト達の新居公開です……！ヒロト多めに出しますよ……！

6 3人の新居（前書き）

ネタが無くなってきました???
誰か助けて下さい（泣）

6 3人の新居

「だいたいなあー、お前はいつも???」

「私は悪くない。お前が気を付ければいいだろう」

「ギャーギャー」

ある日の朝。隣のクラスから聞こえて来る、晴矢と風介の声。どうやらいつもの如く喧嘩をしている様子だ。

「なあヒロトー」

「何? 円堂君」

怒鳴り声をBGMに、円堂とヒロトは言葉を交わしていた。

「止めしないの? いい加減うるさいくないか?」

「??? 円堂君がそう言うなら、止められない事もないよ?」

「そうなのか?」

「うん。あの2人自己主張が激しくて、いつつも喧嘩してるんだ。家でもそうだしなあ???」

「そう言えば、ヒロト達って今どこに住んでるんだ?」

「言ってなかったっけ。学校の近くの、アパートで3人で暮らしてるんだ」

「そうかあ。なんか楽しそうだな」

「今日来る? 用事とか無かったらだけど」

「いいのか? 行く行く!!」

「じゃあ、そろそろ止めに行くか???」

そう言い、ヒロトは席を立つ。円堂も後ろ足から着いて行く。バァン!!

ヒロトは力いっぱい込めてドアを激しく開け、皆がこちらを向く。

ヒロトは笑顔で無言の鎮圧をかけながら言った。

「うるさいよ。静かにしてね? 仲良くしてね??」

「????????? はい?????????」

(ああ???? ヒロトがジェネシスのキャプテンだったの、今になっ

てよく分かった???)

みんな、青ざめた顔で、ヒロトに恐怖を覚えた様だった。

(怖すぎるぜ???ヒロト)

誰もがそう思った事だろう。

「ここか???」

中学生のアパート暮らしといえば、蜘蛛の巣だらけで今にも崩れそうな建物のイメージだったが、意外にも新しい建物だった。

「ギャーギャー!!」

また喧嘩している。

「????????????????」

「すみませんでした」

「あーいう時、何だかすっげー怖いんだけど、ヒロト」

「ああ???あいつ、普段は何もしない方なんだが、特に激しい時はどこで覚えたか知らねーけどおっかねー顔すんだ???」

「あいつのチームがジェネシスに選ばれたのも、納得出来るだろう?」

こんな所で一致団結した3人だった。

「ところでヒロト、その袋なんだ?」

「ああ、これ?これは夕飯の材料」

「ヒロトの料理、すっげー旨いんだぜ!」

「私達2人は自炊出来ないからな???全部ヒロトに任せっぱなしだ」

「へえ」

(ヒロトって???何者?)

ガチャ

「じゃあ夕飯の仕度するから。椅子にでも座ってて」
「そう言いヒロトはキッチンへと去っていった。」

「へえ〜いい部屋だな」

「ああ。このアパートは、行き場所が無くなった俺達の為に警察が用意してくれた所なんだ。隣にはあいつもいるし??？」

「あいつ?」

「バン!!」

すると、勢い良くドアが開いた。

「グラン!!今月のガス代の請求書、来たのか!?!?」

「ウルビダ!?!」

そう。その人物はウルビダだった。

「ん?円堂じゃないか」

「やあウルビダ。請求書なら、ポストに入ってたなかった?」

「おいウルビダ!!おまつ??何でここに!?!」

「失礼な。グラン達と一緒に、海外に行ってたんだ。」

「少年院は?」

「????ああ。お父様が最後の頼みとして、警察に出してくれる様にしてくれたらしい」

「驚いたよ。向こうでウルビダと会った時は。」

「まあな。その時は泣いて謝ったが。あの時の事???なんてバカな事をやったんだろうって、今でも思う。」

「????」

あの時の事。それは、星の使徒研究所の、あの出来事。

「あーーーー!!!」

ふと、晴矢が叫んだ。

「何だ晴矢。いきなり大声だして」

「風介つ!!!お前この空気よく耐えられるな!!!こんな空気、俺の

性にあわねー！」

「あー???」

確かに、この性格の晴矢には、こんな空気は合わないかもしれない。

「どうする？夕飯できたけど??？円堂君も食べてく？」

「えっ？あー！ー！ー！もうこんな時間！？母ちゃんに怒られる！

！みんな、じゃあな！ー！」

そして円堂はアパートを出て、走って家路に着いた。

思えば、波瀾万丈な1日だった。

6 3人の新居（後書き）

どうしてもこの話を書きたかったんです！！実際に少年院から出られるのかは知りませんが。ネタ切れ気味ですっつ！！

次回は、3人+1人の受験シーズン！！

お楽しみに！！そして、ここまで読んで下さった皆様、心から感謝感謝です！！これからもよろしく願いします！！

7 無限の強さ(前書き)

サブタイトルに悩んでいます???

7 無限の強さ

カリカリ????

教室に、誰かがページを捲る音、シャーペンがノートの上で踊る音が響きわたる。

今3年生達、つまり円堂達は受験シーズン第1期だ。といってもまだ10月なので推薦入試の者だけに限るのだが。

「????サッカー部行こう」

ヒロトの一言で、円堂は重苦しい空気から抜け出せたのだった。ガチャ

「あ、風丸に豪炎寺、晴矢に風介!!!」

珍しく部室には3年生の4人が円堂達と他に集結していた。

「おう円堂、お前らもあの空気に耐えられなくなっただんな?」

「あの空気って????お前らもか??」

「ああ????あの空気、容易に喋れもしないからな????おかげで風介と喧嘩もできね????ゴメンナサイ????」

ヒロトが睨んでいるのに気がついて、とりあえず誤った。

「そう言えば円堂君は進路決まったの?」

「うゝん、俺はまだ決まってるないなあ。そう言うヒロト達は?」

「俺はサッカーの専門校に行こうと思ってる。晴矢と風介は??」

「俺もそうだな」

「私もだ。」

「ぶっっちゃけ皆そうだろう」

「夕香もサッカー頑張れって言うしなあ」

「夕香ちゃんか?」

夕香とは、豪炎寺の妹の名前だ。事故に遭ってしまい、つい最近まで意識が無い状態だったのだ。

「夕香がそう思ってくれてたなんて知らなくてさ???? お兄ちゃんは、夕香のためにサッカーしなかったんでしょ?なら今度は夕香

のためにサッカーの学校に行つてね!! なんてさあ???

「いい妹なんだな」

「よおし!!」

ふと、円堂立ち上がった。

「え、円堂？」

「みんなで合格するためにも、今からサッカーの練習だ!!」

「?????!ああ、そうだな!!」

そして、ひたすら練習した。

「スーパーノヴァ!!」

「正義の鉄拳!!」

「爆熱ストーム!!」

「アトミックフレア!!」

「ノーザンインパクト!!」

「疾風ダッシュ!!」

目指せ!みんなのイレブン!!

7 無限の強さ(後書き)

むふふー、遂に、「流星ボーイ」「つながりヨ」のCDを手に入れました！！

嬉しいです！！(ザブングルの???)

そしてイナイレ2やつとクリアしました???

(遅っっ!!!)

ダークエンペラーズが意外に簡単に倒せちゃったりしました???

真? 帝国でレベル上げ過ぎたかな?

風丸を仲間にしたいで二回目も頑張りますよー!!!

では、次回予告。

なんと、次回はガゼルとバーンが風邪ひいちゃいます。それを看病してて寝不足、疲労、過労が重なるグラン。さて、3人はどうなる!?????です。お楽しみに。

では。

8 我慢するな

「へ？風介と晴矢、今日休みなのか？」

朝。円堂が秋に聞く。

「うん。そうみたい。風邪で、ヒロト君が看病してるらしいんだ。ほら、ヒロト君の目の下。隈が出来てる。なんか疲れてるみたい。???大丈夫かなあ」

秋はヒロトを心配そうに見る。

「ヒロト？大丈夫か？」

「ああ???円堂君???おはよう」

ヒロトは弱々しく笑った。よくよく見れば、少し痩せたようだ。

「あ、ああ???おはよう。ところでヒロト、大丈夫なのか？」

「うん???けどまだ風邪をこじらせたみたいで、熱は高いんだけど???」

「いや、お前の事なんだけど」

「???」

ヒロトは首を傾げる。自覚してないのか。

「ちゃんと寝てるのか？隈出来てるぞ。」

「???いや、30分ぐらい寝てるから大丈夫だと思うけど???」

円堂は絶句した。

授業中。円堂が席を見ると、必死に目を開けているヒロトがいた。

「???」

「おい円堂、聞いているのか？」

返って担任に注意された。

「あ、すいませーん!!」

ヒロト帰宅後、部屋にて。

「ふーん、あいつ、調子悪いのか？」

「ああ??？」

「明日にでも倒れるんじゃないのか？」

「まさか??？明日には治ってるだろ」

「そう??？この時は思いもしなかった??？」

「この眩きが??？現実になるうとは??？」

「今日は体育だー。」

「大丈夫か？ヒロト??？」

「うん??？大丈夫??？だよ??？円堂??？君??？」

その刹那。

グラッ

「ヒロツ??？」

ドサッ

「??？?!先生ー!!」

鬼道が叫ぶ。円堂が、ヒロトに肩を貸して立たせようとする。すると、

「??？??？」

「どっした？円堂」

豪炎寺が聞く。円堂は驚きと疑問が混じった声で答えた。

「??？?軽い??？体重が、感じない??？」

「何!?!?」

「まさか、一昨日から何も食べてなかったんじゃない??？」

秋が震える声で言う。

「??？?とりあえず、保健室に連れて行こう」

ここで冷静沈着な鬼道が落ち着いた声音で言った。

「栄養不足、睡眠不足、過労、疲労による倒れるなどの症状??？?ね」

保健の先生が言った。

「とりあえず今日は大事をとって、ここ数日は休ませた方がいいわね???'」

「そうですか???'」

ヒロト達の家・・・

「ヒロトー!」

ヒロトを寝かせ、送ってきた円堂達は、晴矢と風介に事情を説明した。

「そうか???'あいつ、小さい時からそうなんだ???'無理な事もやり通して自分の事など二の次???'根底は無茶しすぎなお人好しなんだ、あいつはな。」

「ったく、だから隅に置けねーんだよヒロトの野郎はっ!!!」
との事だった。

その後元気になったヒロトは、皆にみっちり叱られたのは、言うまでもない。

8 我慢するな（後書き）

だあああ！！今気づきました！！

大体話の始まりが円堂の一言からだ！！

さて、次の存在理由はー

（サザエさんのマネ）

最終回！？です！！ハッピーエンドなんで心配しないで下さい！！
では。

9 サッカーやサッカー… (前書き)

短いですがこの本にて終了です???

9 サッカーやるっぜー！！

（1月）

「失礼します。」

今日は円堂達がサッカー専門校の面接に来ている。

「そこに座って」

ドアを開けた先に居たのは、優しそうな顔をした30代ぐらいの男性。彼は円堂に向かってそう言うと、笑顔で問いかけた。

「君は、あの円堂守君だね？」

「は、はい??？」

緊張しているのか、円堂の表情はこわばっていた。

「緊張しないで、この質問に答えてね？」

そして彼は手元の書類に目を落とし、再び顔を上げて言った。

「君は、どうして我が校に入ろうと思ったんだい？」

初歩的な質問に、円堂の口が開いた。

「俺、この前??？一年前ぐらいに、エイリア学園を倒すために仲間と旅に出ました。楽しい事もあったけど、やっぱり辛い事の方が多かったです。でも、新たな仲間たちに会って、成長しました。俺、サッカーが大好きです！！だから、これからもサッカーを続けたいんです??？」

円堂の言葉に、彼は真剣に耳を傾けていた。

そして彼は立ち上がった。

「はい、よく分かりました。では、結果を待っていて下さい。」

「失礼??？？しました」

円堂は面接室を出た。

「円堂、どうだった？」

円堂に声をかけたのは、豪炎寺だった。

「かなりやばかった??？」

「まあ、結果を待つしかないだろう」

合格発表日（よくわからないので飛ばす）

「いよいよだな??？」

「ああ」

「皆で合格出来るといいね」

円堂、豪炎寺、鬼道、ヒロト、風介、晴矢、吹雪など、雷門中メンバーは、番号表を片手に合格者が書いてあるボードに近寄った。

「????あつた??？」

「俺も??？」

「俺もだ!!皆は!？」

ヒロト、豪炎寺と自分の合格を確認し、円堂は周りを????皆を見た。

「私は合格だ」

「俺も」

「ボクも、受かったよ」

「つてか、落ちた人なんていなくね？」

皆の合格を確認し、円堂はほつとする。

「また、皆でサッカー出来るんだな!!」

笑顔で、円堂は言った。

そして、円堂達の専門校生活が始まった。

（10年後）

「今回の試合、イナズマジャパンの完全勝利!!現在4連勝、キャプテンである円堂、満面の笑顔です!!」

ここはある試合会場。24歳になった円堂達は、イナズマジャパン

9 サッカーやろつぜー!! (後書き)

出ましたね??? 円堂の「サッカーやろつぜ」??? (笑)

では、「存在理由」はこれにて終了です。

読んで下さった皆さん、心より、お礼申し上げますー!

こんな駄作を???

では、また他の小説でお会いしましょう。

2010.1.17

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1261j/>

存在理由

2010年10月10日04時53分発行